

## 第1回（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会 議事録

テーマ：2050年に目指すべきまちの将来像について

開催日時：令和3年8月28日（土）13時30分～15時00分

開催場所：オンライン開催

出席者（敬称略）

氏名	役職	団体名等
隈 研吾	会長	建築家
安藤 梢		三菱重工浦和レッズレディース選手
市川 淳平		さいたま市浦和商店会連合会 副会長
坂井 貴文		埼玉大学学長
田口 裕基		株式会社三越伊勢丹 伊勢丹浦和店店長
鳥羽 三男		東日本旅客鉄道株式会社 浦和駅長
廣瀬 通孝		東京大学名誉教授
向井 亜紀		タレント
安河内 眞美		古美術鑑定士
清水 勇人	座長（司会進行）	

議事録：

### **司会**

これから（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会を開会いたします。本日は新型コロナウイルスの感染状況などを鑑み、無観客生配信といたしました。安藤委員、広瀬委員にはオンラインでのご参加、安河内委員には事前収録でのご参加を頂いております。始めに主催者を代表いたしまして、清水市長より一言ご挨拶を申し上げます。

### **清水市長**

みなさん、こんにちは。さいたま市長の清水勇人でございます。懇話会の開会にあたりご

挨拶を申し上げたいと思います。隈会長を始め、委員の皆様におかれましてはお忙しい中、また新型コロナウイルス感染拡大等の状況にも関わらず、懇話会へのご出席を賜りまして厚く御礼を申し上げたいと思います。また傍聴をお申し込みいただきました市民の皆様には、新型コロナウイルス感染者の急増にともない、会場での傍聴を急遽とりやめ web での配信に変更したことについて、大変申し訳ございませんが、ご理解いただければと思います。

さて、この懇話会は、本市の都心であります、浦和の魅力を更に磨きあげ、2050年の未来においても、市民から選ばれるまちであるために（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョンの骨子を取りまとめるために、設置をしたものでございます。お集まりを頂いております、有識者の皆様には、私がまちづくりを始め、芸術文化・教育・スポーツ・情報などの分野におきまして、国内に留まらず各分野のトップランナーとしてご活躍をされている皆様を選任させていただきました。また、浦和における地域経済状況や交通に関する状況に精通している、地元を代表している皆様にもご参画いただいております。

浦和の現況としましては、県と文教都市として、またスポーツのまちとしての、浦和ブランドが広く評価され、市民意識調査では、10区の中でも「住みやすい」との回答が常に高く、住みたいまちランキングでも上位を獲得するなど高い評価をいただいております。

一方、駅周辺では市街地再開発の進展や都市基盤の再構築などの必要性が高まり、また公共施設の移転計画の検討が進むなど、まちの状況が変化をしております。このような状況を踏まえまして、国内外に誇れ、市民が安心して住み続けられる2050年の浦和の将来像を描くため、有識者の皆様には様々なアイデアやご提案を頂戴したいというふうに思っております。そして懇話会の皆様のアイデアや提案を市民の皆様と共有し、市民の皆様からもご意見をいただきながら（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョンを一緒に作り上げて参りたいというふうに考えております。

それでは本日はどうぞ、よろしく申し上げます。

#### **司会**

本日の進行は座長である清水市長にお願いいたします。

#### **清水市長**

はい、それでは、懇話会に早速入らせていただきたいと思います。本日の懇話会のテーマは「2050年に浦和が目指すまちとは」についてです。まず初めに、隈会長が10日に浦和の方にいらしていただきまして、駅周辺のまち並みや別所沼などをご覧いただき私も一緒に歩かせていただきました。実際に浦和のまちをご覧になって、いかがでしたでしょうか？

#### **隈会長**

私の周りにも、実は浦和のファンって沢山いるんですね。浦和のファンというとサッカーファンという感じだけでなく、まちとしての浦和というのが魅力があって住みたいというようなファンが多いので、実は僕、なんでもかな、確かめてみたいなとずっと思っていた

ものですから、この前やっと、念願叶いまして市長と一緒にまち歩きをいたしまして。やはりこれは宝だなと思いました。宝はですね、一つはウォーカブルな、歩いて楽しいストリートがいろいろあったんですね。遠くから浦和を見ると、やはり浦和は関東平野の真ん中であって、その、どうしてもですね、大きなビジョン、大きなものの中の「点」に見えてしまうのですが、近寄ってみると面白い「線」が沢山ある。これからのまち、世界の都市を私いろいろみていて、ウォーカビリティ、歩いて楽しいがこれから絶対一番の基準になってくると思うんですね。歩いて楽しいから、商業も栄える、それから文化も花開くというような歩いて楽しい要素が浦和に沢山あるというのを感じました。それからもう一つはですね、自然が感じられる。これも遠くから見ると、浦和と自然というもともと山の中へ行かないと自然はないんじゃないかと思うのですが、別所沼始め非常にヒューマンな自然、人間にとって近い距離で感じられるいい自然が沢山ありました。道もですね、意外に気持ちの良い勾配がついていたり、並木がすごくよかったですとか、そういう自然が感じられる部分が沢山あった。特に別所沼はですね、沼の景観だけでなくその周りの整備、その周りにある文化史的資産も非常に魅力的なものが多くて、額縁屋さんですとか、ヒヤシンスハウスですとか、ヒヤシンスハウスは立原道造って建築の人間にとっては神様みたいな存在で、その彼の夢の別荘なものですから、それと別所沼が響きあっている景観なんかは、本当に日本の宝だなというふうに思いました。そういう宝はいろいろあるのですけれども、そういうものを上手くこれから繋げていくということが非常に重要だなというふうに思いました。特に駅前、今回のテーマでもあります浦和駅周辺がですね、やはり20世紀型の広場であり、20世紀型の車の捌き方であるというふうに感じました。20世紀は基本的に自動車の世紀だと私は思うんですけど、今ですが世間は大きく変わろうとしていて、人間が歩く、それから環境、それが別の要素が加わってくるときに、このまちの周りにはですね、駅の周り、やはり今の時代にふさわしいものにこれから変化していかなくちゃいけない、変えていかなくちゃいけないなということで、今回の懇話会のある種目標みたいなものまでまち歩きをしてみて非常にはっきり見えてきました。

#### **清水市長**

隈会長ありがとうございます。他の委員の皆様にもご意見を伺っていきたくと思いますが、その前に、本日参加予定でありました安河内委員から、文化芸術分野に明るく、また国内外の様々なものを目利きされてきたご経験を踏まえまして、浦和のまちづくりに関するお考えを、事前に伺っておりますので、VTRをご覧いただきたいとおもいます。

#### **安河内委員（VTR 出演）**

こんにちは。安河内眞美です。扱っているものは、明治あるいは江戸時代、あるいはもっと古い日本画を中心に扱っております、古美術商をやっております。なんでも鑑定団では日本画の鑑定の担当をしております。これからの浦和のまちづくりということに関して、まず美術という面から申し上げますと、浦和のまちというのは非常に文化・教育機関がしっかりしている、昭和の頃には多くの画家たちが郊外に住んで、おそらくそういうことか

ら区民の皆様の意識も高いのだらうと思っております。それらを土台に、より美術を身近に感じられるまちづくりを進めていただきたいと思います。具体的には教育の場、小学校・中学校で日本の美術をもっと、勉強というのでしょうか、触れさせていただけるといいのではと思います。これは浦和に限ったことではないんですけども、なぜか日本では、自国の美術の歴史を教える時間が少ないように思います。ピカソは知っていても雪舟は知らない、それはどちらがいいとかどちらが劣っているとかではないのですけれども、自分の国の美術、歴史を学ぶことが生まれた国を誇りに思うことにつながっていくのではないかというふうに思います。美術館や博物館に小学校・中学校から連れて行く、この作品を描いた人は浦和に住んでいたんだよとか、そういったこともその浦和のまちを、そして美術を身近に感じるきっかけになるかもしれません。さらに浦和には教育・美術の土台があるわけですから、生活の中に美術を取り入れる、もっとう美術を身近に感じるような環境を更に作っていただけたらなと思います。隈会長と市長の、浦和まち歩きビデオを拝見いたしました。中山道の宿場町でもある浦和の雰囲気のあるまち並みを画面越しではありますけれども、とても感じる事ができました。隈会長のおっしゃっていたように、これからは人がメインのまちづくり、人が歩きやすい、人がまちに出てくるような、そういうまちづくりが求められると思います。私もノルディックウォーキングで、自宅の近くを歩いたりするのですが、水辺あるいは公園はとても歩いていても気持ちがいい、そこに面白いお店とか、ちょっとした雰囲気の良いカフェがあるとっ素晴らしいと思います。現在、まちづくりを進めておられるなか、浦和は若い家族に大変人気があると聞いております。そういう方たちが楽しめるような、スポーツそしてアート、それらのバランスのとれたまちづくり、人が歩きやすいまちづくりを進めていただければなと思っております。

#### **清水市長**

はい、ありがとうございます。それでは、さきほどの隈会長からのご意見なども踏まえまして、委員の皆様、おひとりおひとりからご意見を伺って行きたいと思っております。併せて簡単な自己紹介も含めてお願いできればと思います。

それでは埼玉県内の公立高校で、約10年間教鞭をとられたご経験などを踏まえまして、教育の視点から酒井委員お願いしたいと思います。

#### **坂井委員**

埼玉大学の坂井と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。今、紹介にあがりましたが、埼玉県の公立高校で10年程、教鞭をとってございまして、ただ残念ながら浦和ではとったことがありません。一番近いところでは川口で、三年ほど教員をやっていた経験がございまして。今日は、私に課せられている課題でありますけれども、文教都市浦和ということについて、ちょっとお話をさせていただければというふうに思います。よく知られていることではありますが、浦和は非常に教育に対する、また文教都市ということで、ブランド力が高いというふうに使われております。一つは先ほど安河内委員からもありま

したように、浦和絵描きの歴史もあったと思いますが、もう一つは教育の歴史というものもございました。これは、歴史的に言いますと、実は明治時代から高等教育機関が、この浦和に集中してあったということでもあります。今日はちょっとその歴史についてふれさせていただきたいというふうに思うのですが。一番最初には明治7年に埼玉師範学校がまず浦和の地に出来ております。場所はですね、今の東和銀行の浦和支店のところに、最初あったということもございます。その後明治11年になりますが、埼玉会館のところ、現在の、そこに鳳翔閣ができて、そちらのほうに移っております。鳳翔閣はまた古くご存じだと思いますが、浦和レッズのエンブレムにも採用されている建物というものになるわけでありまして、その鳳翔閣を中心として女子師範学校が出来まして、その付属としまして高等女学校、現在の浦和第一女子高校の前身ができました。その後、この鳳翔閣からそれぞれの学校が移りまして、師範学校は現在の市役所のところに移っております。また、浦和高校、新制の浦和高校は第一尋常中学校といたしまして知事公館の周辺に作られていて、その後移動しているということになります。もう1つ非常に大きな学校でありますけれど、浦和、旧制の浦和高等学校、これは北浦和公園の場所に大正10年に開校されたということでもあります。この歴史を見ていきますと、まず浦和の地に、高等教育機関できて、浦和の中に、まち中に、それが移動しながら、最終的には、周辺に散っていったということが見て取る事が出来るわけです。おそらく、明治・大正の時代にかけて、その時の様子を想像すると、このまちの中には沢山の学生さんがいらっしやって、また教育関係の方も沢山いらっしやったのではないかなというふうに想像するわけです。まさにその時代というのは、浦和が文教都市ということになってたんだろーと思います。そうゆうことですね、歴史的なものが今に続いているんだろーというふうに思っております。ちなみに師範学校と旧制浦和高等学校は統合されて、埼玉大学となりまして、今の北浦和公園のところで開校したわけでありまして、今は移動してございまして下大久保の方にあるのですが、そういうことで浦和のまちを今みると、大学との関係は希薄に見えるのですが、実は歴史を見ますと大学との関係は非常に濃密であったと、それがこの文教都市を形作る一つになってたんだというふうに強く思っております。今後ですね、この文教都市をどういうふうに発展させていくのかということを考えていかなければならないんだろーと思うわけです。現在あります、様々な学校、これは小中高非常に有名ないい学校が沢山あります。この学校をより、機能を強化していくのは当然のことではありますが、もう一点、別の方向から一つ申し上げたいと思うのですが、人生100年時代の教育の発信地というようなことも考えられるのではないかとこのように思っております。リカレント教育とかリスクリング教育とか今は言われているわけでありまして、今は人生100年時代というふうに言われているわけでありまして、昔ならば、教育をして働いて老後という三段階というワンステージだったのですが、今は寿命が延びてきますと三ステージが、特に働くところが長くなってきますので、特にその部分で教育を受けながら働いていくという時代が多分くるんだろーと思います。そういう時にリカレ

ント・リスクリングということが非常に重要になってくるのではと思っております。埼玉大学でもそういうことで、様々な展開をしている訳であります、近隣のさいたま市の大学も含めると様々な展開を行われているわけでありまして、そういうものを上手く集めてですね、さいたま市が中心となって集めていただいて、リスクリングあるいはリカレント教育、それから講演会等も含めてそういうような発信基地とした形を作っていくことができれば、新たな文教都市の魅力というのが出来ていくのではないかなと思っております。そういうことで、ご検討いただければというふうに思います。以上です。

#### **清水市長**

坂井委員ありがとうございました。続きましてリモートでご参加を頂いております、安藤委員、浦和拠点にプロサッカー選手としてご活躍をされておられますけれども、海外、またヨーロッパのまちにおいても活躍されたご経験を踏まえまして、アスリートの視点からのご意見を頂戴できればと思っております。よろしく申し上げます。

#### **安藤委員（リモート参加）**

こんにちは。浦和レッズレディースの安藤梢です。私自身は大学2年生の時から7年間、まず浦和でプレーをして、そこからドイツで7年半プレーをして、また浦和に戻ってきてサッカーをしているのですけれども。初めて浦和に来た時にすごくびっくりしたのが、今でも覚えているんですけど、浦和レッズの試合があるときコンビニにユニフォームを着た人たちが沢山いて、まち中が赤い旗でいっぱいになって、まち中が真っ赤になっていることにすごくびっくりしたのを今でも覚えているんですけど。それがドイツに行ったときに、ドイツはどのまちでもそう言った光景が見られて自分の生まれ育ったまちのクラブを強かろうが弱かろうが、子どもの時からおじいちゃんおばあちゃんと家族がみんな一緒になって応援する一体感というものを見てきて、日本の中でそういったヨーロッパのサッカー文化みたいなことが再現されているというか、そういうまちは浦和ぐらいなんじゃないかなというのが、私はそう思っているんですけど、本当にこうスポーツを通して、コミュニティが出来てみんなが元気になっていくようなまちづくりが浦和だからこそできることなのかなと考えています。

#### **清水市長**

はい、ありがとうございました。それでは、同じくリモートでご参加いただいております廣瀬委員。これからの社会に求められております ICT や DX といった、先進技術などの情報、IT の観点からのご意見を頂戴したいと思います。よろしく願いいたします。

#### **廣瀬委員（リモート参加）**

こんにちは。東京大学の廣瀬でございます。僕は実は出身が鎌倉でありまして、この浦和の懇話会でも、よく市の方が鎌倉のことをおっしゃるのですけれども、鎌倉の方の人間でありますもので、浦和に関しましては今までちょっと残念ながらお付き合いが無くてですね、これから勉強させていただきたいなと思っております。ただ、実は僕、鉄っちゃんでありましてですね、駅周辺というキーワードには非常に刺さるものがありまして、この懇話会、

是非いろいろご協力させていただきたいと思っております。

冗談はともかくといたしまして、専門はコンピューターとか情報であります。特にその中でも、バーチャルリアリティであるとかテレプレゼンスとか、そういう技術の研究をされていて、特にこのご時世リモートのキーワードが非常に大きな役割を果たすようになってきております。それと関係することでもお手伝いできるんじゃないかと思えます。この懇話会は特に浦和駅周辺のリアルな空間を対象とする懇話会でありますので、自分はリアルに対するバーチャルというものに対するコメントが出来ればいいなというふうに思っております。まずバーチャルでできることを一言で申しますとリアルで解決が非常に難しいという問題に対して、何らかの回答を与えることが出来る、ちょっと固い言葉で言えば回答の自由度を増やすことをできる、そういう役割だと思えます。典型的な例があつた今我々が直面しているコロナでありまして、実際我々の会議などは会えないからリモートで行きましょうという選択肢が増えるということだと思えます。つまり、重要なことは、我々の活動を止めないことが非常に重要だと思えますので、そういうためにはバーチャルという選択肢を持つておくことは極めて重要だと思えます。例えば商店街の活動等々でも、バーチャルな店舗を持っているか、実店舗だけでいくかという点においては、バーチャルな店舗は今ものすごい役割をはたすようになってきているわけですから、もしも今回のコロナが、10年あるいは5年かな、早かったらと思うと、僕自身は背筋が寒くなる思いがいたします。世の中の活動が全て止まっちゃう、状況になったと思えます。ただ、今日僕が申し上げたいのはですね、そういう役割はもちろんあるのですけれども、そういう、いわば救命ボートの役割だけでなく、もっとバーチャル、あるいは情報そういったものをまちの基盤として取り込んでいくという考え方がもうちょっとあってもいいかなというふうに思っています。実はその、バーチャルリアリティって技術は登場して30年位になるのですけれども、最初にですね、この技術を目にした時に、技術者たちは何を言ったかという点、コロンブスがアメリカ大陸を発見したようなもの、というふうに言った人がいるんですね。これはですね、新しい活動空間が見つかったということなんです。今は甚だ不十分ながらそのネットワークという中において、例えば仮想店舗が出てきたり、仮想の通貨が出てきたりとか、いろいろバーチャルワールドというのが広がりつつあります。だから、デジタルツインという言葉をもしかしたら聞いたことがない方おられるかもしれませんが、最近、非常に広がりを見せつつある言葉でありまして、例えば、浦和駅の周辺のデジタルツインをとりあえず作っておくというだけでもですね、相当大的な意味があるのではないかと思えます。つまり、デジタルの空間のいいところというのは、それを何重にも使えるんですね。そういう、パラレルワールドというのですけれども、パラレルワールドを準備しておくということは、その都市にとっては大きな魅力になるということだと思えます。ちなみに、10日に、隈先生がリアルに浦和を訪れて、市長さんとかこういう所が面白いとコメントされたビデオを送っていただきましたけれども、「おおそうか」と思ひまして、Googleのストリートビューというのがあるんですけれども、

ストリートビューをそのまま何も知らずに歩きまわるとなんだかわからないのですが、あのビデオではことここに行ったのかと知って、それから Google ストリートビューを見てもみずと、なるほど浦和のまちというのは駅を降りたことがないのですけど、通過は何べんもしているのですけれども、完全ではないのですけれども、いろいろな予備知識を得ることが出来たりいたしました。多重利用というのをこれからは考えてみるといいのかもしれない。この多重利用というのは、空間的多重利用というのもそうですし、さっき先生が言っておられたような時間ですよ、歴史をどういうふうに見るか、時間的多重利用のことも考えられると思います。一つそのようなことも考えられるのではないかというふうに思います。それからちょっと時間をオーバーしちゃうかもしれませんが、今は、もう一つ考えておかなければいけないのが、先ほどお話いただいたような、高齢者問題ということだと思います。この実はデジタルとかバーチャルというのは、実は高齢者から一番遠い話題のように聞こえますが、実は高齢者ほどデジタルだろうというふうに思えます。つまり、高齢社会になってくると動き回るといのが大変になってきますので、高齢者のモビリティを確保するであるとか、あるいは高齢者の社会参画を促進するとか、そういう意味において、こういった足掛けというのは必ず作っていかねばならない問題だと思います。2050年というのは高齢者人口が、マジョリティになるという極めて重要な年だと思いますので、この懇話会は2050年を見据えてっていう懇話会なので、そういうデジタルというものをどうやってリアルな浦和と併せて考えていくかというのが、一つ重要な問題なのかなというふうに思っております。以上でございます。

#### **清水市長**

廣瀬先生ありがとうございました。それでは続きまして、さいたま市出身であり、また浦和をよくご存知であることや、数多くのメディアへの出演、または講演会等で全国いろいろな都市を見てきたご経験を基に、向井委員からご意見を頂戴したいと思います。

#### **向井委員**

はい。今浦和のお話を聞きながら「あ、私40年前の高校生だったんだな」と思いながら、この40年間で浦和のまちがかなり変わったなど、今思い出しながらお話を伺っていました。40年前の浦和第一女子高校の高校生だったのですけど、この間、駅から歩いて学校に行こうと思ったら、学校に行く近道の裏道がなくなって、びっくりしたんですけど、でも今回こういった2050年というこれから30年あとのことを考えてまちづくりをみんなで話し合おうというその動きに、とても興味があって参加しました。そして浦和第一女子高校時代の仲の良い友達、ラインで繋がっていますから「みんな何か意見ない？」それから、私、さいたま市のもともとは大宮市の部分だったのですけど、西区の出身なんです。その西区のやはり浦和に関わっている、幼馴染たちにラインで連絡したんですね。浦和高校のお友達が何人も連絡してくれたんですけど、中には大きな銀行の頭取になった半沢君もすごい真面目な意見を寄せてくれたんですけど、みんな浦和にものすごくやっぱり思い入れがあって、浦和の行く末っていうんですか、これからというものに期

待しているんですね。一応、私たちは小さいころは大宮に住んでいたのですが、大宮の駅前の開発のいい部分とよくなかった部分というのを、身に染みて感じているんですね。大宮の面影というものが一瞬でなくなってしまうような、駅の細切れのような開発というのが、ちょっと残念で、でもそこはそこで大宮の面白さにはなっていると思うんですね。でも逆に浦和にはもっとのんびりしっかりゆっくり、住みやすさを残しながら、昔の風景を残しながら、発展、生育して行ってほしいなと思っているんですね。私、高校時代、新体操部にいたんですけども、新体操部の先生が浦和高女時代に、それこそあの場所で学んでいた浦和高女出身者だったんですね。その高女の顧問の先生と、いつもいつもお話をしていると、ものすごく考え方が進んでいるんですね。私達ちょうどバブルの頃に社会人になって浮かれていたりとか、それでもその中で、女性は結婚したら子供を産むの？仕事にまた残るの？どうするの？みたいな感じで女性の生き方というものに、すごくまだまだ押さえつけられていたんですけど、その高女の先生と話していると、どんどん自由に表に出て行きなさい、なんでもやっごらんさい、そんなね、仕事やっちゃだめだっていう旦那さんのことは蹴っ飛ばしていいのよ、みたいな感じのとっても面白い先生だったんですね。その先生の言葉を思い出しながら、浦和はやっぱそういういろんな学びに裏打ちされた強さをもっているなと思うんですね。さっき、安藤さんが言った、レッズがこのまちに入ってきた時に、実は私はとても怖かったんです。私たちが青春時代を過ごしたイトーヨーカ堂の前のあたりの庶民的な通りに、赤い旗が振り回される様な、「わー！おねーちゃんこっちでのでいけー！」みたいな人がウワーと溢れて、このまちはどんなになるんだろうねって女子大生くらいの頃の私は怖がっていたんですけども、それも上手に浦和はゆっくり確実に飲み込んで、浦和の良さにしちゃったというところがあるんですね。だから、旅番組を長くそれこそ三十年もやっている旅サラダっていう番組があるんですけども、その番組の中で1400回、1500回の放送の中で、埼玉、それも浦和、さいたま市が取り上げられることっていうのは全国一少ないんです。埼玉が取り上げられることが全然ないんです。でもそんな他の人からわかってない浦和の良さ、さいたま市の良さがあるぞというのが私達の実宝物でもあるなと思うので、他の人たちが「え？ダサイ玉」言うところから、私、埼玉を応援しましたけれども、ゆっくりそういった浦和高女時代のお姉さんたちが、いいのよがんばるさいって言う文化の中で私達は育ってきたので、これからの浦和からその女性の生き方とか、家族の在り方とか、おちびちゃん世代、それから大先輩世代と一緒に住むというような文化が、浦和から生まれて欲しいなと思います。旅番組をずっとやっていると、いろんなまちをみるんですけども、パリとか台湾が私は参考になると思うんですね。パリにそれこそ新体操時代の高校の同級生が住んでしばらく子育てしたんですけども、パリでは朝ごはんを作らなくていい、子どものお弁当を作らなくていい、それはまちに美味しいデリがあるから。だから朝ごはんはフルーツとヨーグルトとハムを切れればいいんじゃない。昼ごはんは、みんなでちょこっと惣菜をこうパンに挟んで、それを学校に持たせればいいんじゃない。その代り土日はフルコースのご飯を

作ろう。土日は家族で一緒に過ごそう。家族で一緒に過ごす時間が大事だから、じゃあ家で作ったフルコースの料理を他の家族に食べに来てもらおう。そういう時間が流れるんですね。だから働くお母さんが無理しなくていい。それはおじいちゃま、おばあちゃま世代が、その価値観を認めてくれるから。それが当たり前になって、お孫ちゃん世代に「そうだよね、ママは一生懸命お仕事しているんだから、無理して僕のお弁当を作らなくていいよ、みんなそうだから」「朝ごはんも昼ごはんも無理しないで、その代り週末楽しく過ごそうね。」そういうような文化が、浦和からゆっくり、親子三世代のまち歩きから。それこそほんと台湾などはウォーカーブルなまちで朝ごはんから親子三代で屋台で食べたりするんですね。それぞれのお家は別々なんです。おじいちゃま、おばあちゃまのお家、子育てのお家、また若い人のお家、違うんですね。すごくコンパクトなお家に住んでいながら、まちに出たら誰かに会える、まちにでたら屋台でいつの間にか朝ごはんを一緒に食べて、そこから子ども達が、いってきますと学校に行く、そんな動きが浦和の駅の周りにあればそこから文化が生まれて、そこからいろんなものを飲み込みながら新しい発展があるんじゃないかなと思って楽しみにここにやってきました。少し長くなったのですが、伊勢丹、頑張ってください。あのですね、伊勢丹が元気無くなったら、皆さん浦和高女時代の人たちがおしゃれを忘れてしまったんですね。だから全部が支えあいながら発展していく、歩けるまちに本当になっていきたいなと思います。すみません。長くなりました。

#### **清水市長**

ありがとうございました。ここまでは各分野の専門的な視点からのご意見を頂戴しました。続きまして地元浦和を代表する皆様に伺って参りたいと思います。まず始めにさいたま市浦和商店会連合会副会長として、浦和地域の活性化に取り組んでいらっしゃる市川委員からご意見を頂戴したいを思います。

#### **市川委員**

地元浦和商店会連合会副会長の市川です。本業は不動産賃貸業と仲介業を浦和駅近くで約30年営んでおりました。たまに旅行に行くのが好きで、旅先の地元の人に浦和ってどんなまちですか？と聞かれる時があります。その時私は「浦和には浦和レッズと伊勢丹があります」と答えることにしています。両者とも全国的なビッグネームですから「大きなまちなんですね」と言ってもらえます。浦和駅周辺の活性化については、この両者との相互協力を中心に行ってきました。例えば地元商店会では、浦和レッズの協力の元、Jリーグ開幕に向けて、浦和区全域の街頭にレッズのバナーフラッグを掲げ、まちはサッカータウン壮観の眺めになります。また毎年初頭にはさいたま市や地元企業の協力の元、浦和駅西口ロータリーと駅前商店街でクリスマスイルミネーションの点灯を行います。レッズ、浦和伊勢丹、地元商店会でサッカーのまち、浦和をアピールし今や浦和の冬の風物詩になったと自負しているところです。浦和レッズと浦和商店会連合会では長年の協力関係を認めて、今月8月6日、浦和の地域経済の発展を含めた地域貢献活動を共同で実施していくことを目的に業務協定を締結したことを申し添えます。普段、まちの商店や商店会は一見、まち

づくりにはあまりかかわってないように見えますが、実は住民の日常を支えるまちの構成要素です。商店や商店会のないまちはありえません。住所の天賦でしかもちえない魅力的なまち並みを実現することは商店会の願いです。

余談になるかもしれませんが、次に地元不動産業者の視点から感じる浦和の特色についてお話しします。私の店は駅前立地のため、貸店舗を探すお客様が多く、たまに浦和と大宮の違いを聞かれます。簡単に言いますと大宮は商業都市、浦和は住宅都市。大宮には歓楽街があるけれども浦和には歓楽街がない。オフィスや居酒屋などが大きく展開するのが大宮、浦和は住民サービス系の美容室、クリニック、塾、専門料理店などの業態が向いている。そして浦和出店のキーワードは主婦とファミリーです、と説明しています。またマンション用地を求めるデベロッパーの来店もあります。浦和の教育熱と相まってマンション需要が高いからでしょう。知る人ぞ知るですが、浦和駅周辺は借地が多く、借地上の建物が建て直されないまま古屋となっているものがあります。昨年デベロッパーが約5件分の底地を買って、賃借人に立ち退きを迫るというケースを目の当たりにしました。合法だとしても丸々利益目的の強力なマンション開発が浦和のまち並みと景観が損なわれる恐れもあると思います。補足ですが、浦和は商売をする上でも、生活する上でもトラブルが少なく、良識ある住民が多いのではないかと実感しております。今後も安心・安全なまちとしての維持・発展を望みます。私からは以上です。

#### **清水市長**

はい。ありがとうございます。続きましては何人かの委員さんからも、伊勢丹の名前がでておりましたけれども、株式会社三越伊勢丹執行役員伊勢丹浦和店店長として地元商業事業者の立場から、田口委員からご意見を頂戴したいと思います。

#### **田口委員**

ご紹介ありがとうございます。伊勢丹浦和店の田口と申します。いつもご贖目にありがとうございます。向井さん、本当にありがとうございます。私は昨年四月に着任しまして一年半ですが、伊勢丹浦和店は今年度40周年を迎えます。まさに先ほどお話の中にありました向井さんが女子高生だったというころに、ちょうど開業させていただきまして40年経ちました。やはり40年成長し続けておりまして、三越伊勢丹グループの中でも大変優良な店舗として位置づけられておりまして、今年度も引き続き投資をして改装もさせていただいて、新しいお客様も呼び込みをしようと頑張っております。なにはともあれ、また商業環境と言いますか、まさに駅前周辺の人口がこの10年間でずっと増加し続けている。これ非常に大切なことで、少子高齢化が進んでいる日本国内の中でも大変稀な素晴らしい商環境であるというふうに位置付けられます。また教育熱心でまたその教育の水準が高いと先ほどから再三お話が出ておりますけれども、そう言った方々が多いという事と同時に調神社始めとする非常に伝統のある落ち着いたまち並みがしっかり残っているということ、一方でサッカーのまちとして熱い情熱を持ち合わせているということ、特にスポーツも勉強も両立させようという、そういった考えでの子育てに、熱中する・集中する方々がど

らんどんお住まいになっているのかなというふうに感じております。特に商業、あるいは百貨店として次世代として、お子様その親の世代、三世代が揃うというですね、その中でも経済的にも比較的豊かな方々が増えていると、いう事が40周年、40年間支えてきていただいたまちの状況なのかなというふうに思います。次世代家庭という考え方はですね、高砂小学校が今年150周年ということで、数々のコラボイベントをやらせていただいております。40周年と150周年の昔を振り返った記念写真展等をやらせていただいております。その中では地元の書道家・岩船ひろきさんに題字を書いていただいて使用して出いただいたこともあって、非常に地元とのコラボを重視してやっています。40周年というと、よくセールとか販売の企画というのがありますけれども、今回は私とみななで一緒に地元で考えて、地元への感謝への企画にしようということで、その気持ちをしっかりと表現をする一年間にしようというふうに考えております。今、まさにこれから最終決まるのですが、伊勢丹浦和店マスコットキャラクター総選挙というのを今やっております。伊勢丹浦和店のイメージをどう考えますか？ということで、これは高砂小学校児童170人の方から、皆さん書いていただいて、その中からまず3つ選ばれました。9月10月にこれ最後1つを選びますので、その時はまたしっかりとお披露目をさせていただきたいというふうに思います。まさに百貨店というのは本来は公益証券からたくさんお金をかけて、たくさんお呼びをしたいということが、百貨店の王道なのですけれども、浦和に限ってはですね、まず浦和のまちと一緒に浦和の住民を大切にして、このお客様を大切にすることによって浦和の価値があがる。そうすると広域からも今度浦和の伊勢丹でお買い物をすることに憧れをもってもらえる。ですからそういう意味では非常に浦和の価値があがること、イコール浦和の駅前の価値も上がりますし、商業事業者も一緒に潤うということで、一緒になって成長していける、そういうことを目指していきたいなど。さっきも仰っていただきましたが、確かに伊勢丹は全国ブランドですが、浦和の周辺の方は伊勢丹というと伊勢丹浦和店のことを伊勢丹と言っていたかと。ということですが、本当にありがたいことだと思います。こういった形でスポーツも芸術も教育もそういったことを親しんでいる方をお客様にさせていただいて、今後も一緒に発展させていただきたいというふうに思っております。どうもありがとうございました。

#### **清水市長**

はい。ありがとうございました。最後に JR 浦和駅長として駅から地域の魅力発信に取り組みまれています、鳥羽委員ご意見をお願いしたいと思います。

#### **鳥羽委員**

はい。明治16年ですね7月から初代を迎えて55代目の浦和駅長の鳥羽でございます。よろしくお願いたします。皆さん、ご存知のようにですね、浦和という名前がつく駅は8つございます。その中でもですね、中心の浦和駅ということで、駅長をやっております。それぞれ今 JR の各駅、乗降人員というのが、2020年度のものがこの間、発表になったのですけれども、錦糸町に次いでベスト37位ということでですね、かなり乗車の人員が多

い。ちなみにですね、38位は赤羽駅ですけど、赤羽駅を超えて乗車人員が多いという駅でございます。私4年前は同じ埼玉の川口駅で駅長もやっていたんですけど、それぞれの駅が地域の特性を活かしながら、地元の方と交流を図っております。特に浦和駅では、先ほどからありますように、文教であったりまたは食・スポーツ、そういったことを通じてですね、例えば学校の文化祭をそのまま駅で開催をする、または江戸時代からの宿場町、そういった時代ですね、名物のウナギを、またはサッカーのまち、そういったものをですね、駅からわかりやすく紹介をしていく。多くの方が集って、そして行き交う場として、情報を発信。そういったことを図っております。JRの中ではですね、駅という位置付けなのでですけども、住んで良かった、そして学んで、働いて良かった、また訪れて良かったと感じていただけるようにですね、そういったまちづくりを、駅からも進めて行こうと考えております。駅の周辺からは、線路を境に東西違ったまちの様相を感じるのですけれど。大きくまとめて見てみるとやはり浦和は落ち着いた静かな印象で、とても魅力があると私自身も感じております。そういったことを今後も引き続き残してほしいなと思っております。また、駅にいますとよくお客様にいろんなご案内をします。是非ですね、分かりやすいご案内、例えば案内サインであったりとか、そういった情報の電子掲示板がいろんなところにある、例えば、MaaS、ルート検索して目的地まで 電車に乗ってきて、バスまたはタクシー、そして自転車、そういったことを利用して移動の方法、所要時間またはホテル・レストランなどの予約とかチケットを購入できると、行きたい場所に楽々といけるといいうまちづくりをしていきたいなと思っております。簡単ですけども以上になります。

#### **清水市長**

ありがとうございました。委員の皆様からいろんな視点からご意見を頂戴しました。今までのご意見を踏まえまして、これから更に詳細な議論を進めて参りたいと思っております。安河内委員には冒頭でいただいたご意見に加えまして、他の都市と浦和を比べた視点で、ご意見いただきましたのでVTRをご覧いただきたいと思っております。

#### **安河内委員（VTR 出演）**

なんでも鑑定団で、全国を回っていると申しまして、大体が空港なり駅なりに着いて、ロケバスに乗って、市民ホールあるいは会館といったところに行つての収録、終わればすぐにまた車で空港に引き返すので、なかなかまち中をゆっくり見るといふことは、よほど一泊するとかない限り、ないものですから、それだけに関して言えばどこの空港もどこの駅も、だいたい最近では整っているというか。よく言えば整っている、悪く言えばもうどこに行つても同じなものですから、結局しばらくするとどこに行つたか忘れてしまうというところが正直なところで。それを言えば、私は専門ではない分野になってしまひますけれども、駅の作りですとか、そういうものが特徴的な何かがあれば、もっと印象に残るのではないかなとは思ひます。まち中のことは、ビデオを拝見する限り、とても趣のある額縁屋さんとか、別所沼の辺りでしょうか、その辺の雰囲気はとてもいい空気がこう伝わってくるような感じがいたしました。そういうところをもっと、やっぱりまちというの

はどうしても無機質になりがちだったのを、もっと緑があり、人が歩きやすいまちというものをつくっていただけると、自分のまちというものに対して愛情も高まっていくのではないのかなと思います。北九州は昨今非常にクローズアップされてしまっているのですけれども、まちとしてはなかなか、お堀があったりとか、博多が一番大きなまちなんですけど、福岡の中では。それに、そこまでではない、ちょうどいいサイズの北九州市というまちは、大変住みやすいまちですし、何かで見ましたけれども、シニア世代に優しい住みやすいまちみたいなランクでは上位に挙がっているような感じがいたしました。やはりこれからはそういう、シニア、年配の方が増えていく中で、落ち着いたまちというのは理想的だなというふうには思っております。そこには当然、美術・芸術、そういった心を豊かにするものがあってくれるというのが非常に重要なことだろうなと思っております。

#### **清水市長**

はい。ありがとうございます。それでは実際に浦和駅のまちを歩いていただきましたけれども限会長から他の委員の皆さんに、何かお聞きになりたいことがありましたらですね、ご指名していただけたらと思っております。

#### **限会長**

市川委員に伺いたいなと思ったのですが、先ほどですね、大宮と浦和の違いをすごいクリアーに対比していただいて分かりやすかったんですが、コロナの後、どういうふうに、不動産のニーズが変わっているとかですね、こうゆう傾向が出てきているとか、コロナの後というのは、これがニューノーマルになるという話もあるので、これからの世の中の一つの大きな指針が得られるじゃないかと思ひまして、その辺、肌で感じていることがあったら伺いたいなと思ったのですが。

#### **市川委員**

市川です。お答えいたします。まずですね、浦和も駅周辺で撤退が続いています。これは主に飲食店です。それから、アパレル、この辺は出て行きます。大きさは先ほど触れましたが、ハコの大きなもの40坪、飲食店では40坪、一旦出た後なかなか入らないです。20坪、この辺は入ります。それから、今、さいたま市の特徴と思いますが、保育園が多少不足しております、私も美容室が抜けた後、2軒あったのですが、それが全部保育園で埋まりました。すぐに埋まりました。これが4倍位の申し込みがありました。ですので、コロナでダメなものと、コロナでもなんとか入ってくれる。これがはっきりと分かっているような気がします。大宮は多分ハコが大きかったり、それから所謂飲食店、スナック系、こういったものは非常に難しいのではないかなと思います。

#### **限会長**

非常に、有益な意見をありがとうございます。あの、あと向井委員にもちょっとお伺いしたいのですが、やはり長い時間を見てきて、まちは生き物ですからどんどん、どんどん変わって行って、それで、どういうふうな部分が伸びて欲しいとか、どういう部分が残って欲しいかというのがおありかと思うのですが、更にお聞かせいただきたい。

## 向井委員

はい。私が高校一年生の時は、コルソがなくて伊勢丹がなくて、高校2年生の夏にコルソの中のロッテリアでバイトをしたなという記憶があるので、あつという間に、いろんなものが変わっていったんですね。私はそれこそ大宮の出身ですので、大宮に帰るとますますまた見覚えがあるものが無くなって、自分に対する、なんというのでしょうか、思い出に浸れる場所というのが、自分の中のふるさとしてイメージが、大宮なくなってしまったんですね。私の場合は大宮、ふるさとイコール友達みたいになってしまったのですけれども、それではやっぱり本当に寂しくて、なにかちょっと一人になりたいとか、寂しくない程度に一人で、ホッとできる何かどこかを歩いてみたいなという、そういう瞬間にホッとできる景色が無くなってしまった。友だちには自分の胸の内を上手く説明できない時に、歩いて行けるとか、ちょっとベンチに腰掛けていられるとか、そういうボーっとできる「ただいま」って帰っていく場所、でもあんまり詮索して聞かないでくれる場所、そういう場所がふるさとはあって欲しいなと思うので。パッと見はカッコ良くないと思うのです、大きなビルが建ったですとか、今どきのすごい店舗が揃っているというのではないかもしれないんですけど、何かホッとできる、隙間のような場所がいつもあってくれたら嬉しいなと思うんですね。高校の時の先生も、30歳上なのでかなりご高齢なのですが、先生を訪ねて行っても、やっぱりどこにいきたい、何を食べたいって仰らずに、割と歩きたいと仰るので、誰かと一緒に歩きたかったというお話が出るときに、何かこう「ただいま」って帰れる景色、みたいなものがあったら嬉しいなと思います。すごく、なんか、ぼんやりしているのですけれども。なので、隈さんと市長さんのまち歩きVTRを見た時も、こちら辺ずっと壁でしたよねって仰っている場所が、今公園のようになっていますけれども、その壁があんまりないまちで見通せたり、花が咲いたり、実がなったり、雪が降ったり、落ち葉が落ちたりというような、なんかちょっと見通せたりするような場所があつて欲しいなと。懐かしい空気を、吸えるベンチが欲しいとか、そんな感じになってしまうのですけど。今、地下街がとても発達しているので、浦和の駅もあんまり人の様子が見えなくなってしまって、それがいいのか悪いのか、私にとっては懐かしさがなくなって、寂しいので。もしかしたらなんですけど、いろんな世代の人たちの話を聞くというの、プラス、私も高校の時の同級生にポンと投げたらいっぱい話が戻ってきたのにびっくりしたんですけど、それぞれが自分の地元を持っていて、出身小学校、高砂小学校の子もいますし、いろんなところがあるんですけれども、小学校・中学校で大事にしている地元というのを持っているので、その地元を持っている皆が、持ち寄れるような、話し合いの場所があると、何が大事で何がもう役割を終えたのかっていうのが分かるかなと思うんですね。大宮をちょっと反面教師にしてください。私のふるさととは使い捨てのまちといわれているようなエリアなんです。西地区の大宮プラザというところなんですけど、若い世代がワーッと子育てのために、新興住宅地に入って行ってそこで親世代はどンドン年をとって行って、若い世代は出て行って、ものすごく平均年齢の高いまちになって、ある意味、なんというの

でしょう、使い捨てにされてしまったのではないかというような取り残され方をしているエリアでもあるので。それがないように、おじいちゃまおばあちゃまと一緒にお孫ちゃんが、ベンチに座れるような、そんなお散歩ができるような。今も浦和は新しいところと古いところと、カッコいいところとダサイところがごちゃ混ぜなんですけど、そのパッチワークを繋げるような、お散歩ができるような、ベンチがあったりするようなところがあったりすると嬉しいなっていう。そんな希望があります。

### 隅会長

ありがとうございます。もう一人ですね、廣瀬委員にちょっと聞いてみたいのですが、私と廣瀬委員はいろんなところで一緒に活動することが多くて、私はリアルとで都市とか建築、リアルの代表として。バーチャルの方の情報の代表として廣瀬先生に参加して欲しいみたいな形でよくペアになることが多いのですが、今日、いろんな皆さんからいろいろなことを聞いて、かなり浦和のイメージが具体的になってきたと思うのですが、この浦和ならではの DX とかですね、浦和ならではの情報のなにか使い方みたいなアイデアがもし湧いてきたら、そういうのを伺いたいなと思いました。

### 廣瀬委員

今ですね、向井さんの話を聞いてて、これは浦和ならではのでないとは思いますが、これから非常に重要な問題になっていく、開発と保存のバランスだと思うのですが、この辺隈先生は、比較的うまくリアルな世界の中で、そこら辺の開発と保存のジレンマってのは解決していくもんだと思うんですけど、これからものすごく細分化していくと思うんですね。それで隈先生が浦和のまちを見て、先ほどのコメントで、細かいところで面白い部分が沢山でてくるってことをおっしゃっていたんですけど、これは多分浦和ならではのですね。例えば京都とか奈良とかみたいに、なにかものすごく大きな観光資源があると、それで終わっちゃうんですけども、逆に、こういっちゃ失礼ですけど、そんなに大きな観光資源というのがそれほどなくて、しかしまち全体としてはすごく面白い、観光資源が沢山あるという。これはちょっと難しい言葉でいうとエントロピーが高いんですね。ものすごく複雑だっていうようなまちだと思います。先ほど、駅長さんが仰っていたように、浦和って駅だけで8つくらいあるっていうのが、多分この浦和を象徴することかなと思うんですけども、非常に分散的なんですよ。そういう時の、問題に対して対応するというのが、実はすごく得意なのが情報なんですね。例えばライフログという技術があって、いろんなデータを大量にビッグデータとして集めておいて、それをいろんな方向から、各人毎が利用するみたいな、利用のしかたというのは、これは、テレビで一気に放送するとなると、一チャンネルだけでしか放送できないので、ある特定の層にしか訴えかけることができないんですよ。ところがインターネットというものの底力というのは、各人がいろいろなものを見る事ができるから、そういう非常に多角的な層に訴えかけることができるという意味において、非常な力を発揮することができるんじゃないかなと思います。ある世代にとって、とっても懐かしいものというのが、別の世代にとっては、そんなに興味をもた

ないというようなものもあるかと思うし、それを全部間をとっていくと難しくなっていくかなという感じがします。例えば僕も博物館のお仕事を、JRさんと一緒にさせていただいたことがあるんですけども、例えば有名なのは東京駅の復元なんですけど、博物館はどうしても原型に復元しようとするんですね。そうすると、東京駅も今ご案内のようにドーム型の出来上がった当時の大変立派な東京駅が復元されたんですけども、僕らぐらいのジェネレーションにしてみると、三角屋根の空襲で焼けちゃってちょっと貧相になった東京駅というのが、実は戦後の復興期から僕らが小っちゃい頃からずっと見てきた東京駅なんですよ。文化の保存というのが、逆に文化の破壊とかそういう方向になっちゃう。そういうものを支えるっていうのも僕は、手前味噌ではないんですけど、バーチャルみたいなもので、デジタルのツインの中でいくつかとっておくとかね、そういうことだと思います。問題はどこの部分を、そのリアルで処理して、どこの部分をバーチャルで処理するのかというところを、塩梅を上手く考えることができればいいかなというふうに思ったりしています。

#### **清水市長**

ありがとうございます。それでは、続きましては、浦和の魅力に教育というお話がありましたけれども、今日の教育環境が充実しているまちとして市民の方に選ばれているというのが、浦和の特徴でもありますけれども、教育者の視点から更にこんなまちであって欲しいというご意見ありましたら、頂戴したいと思います。

#### **坂井委員**

今回、お話を聞いていて大変参考になりました。ありがとうございました。特にゆっくりしたまちとかですね、キーワードとして落ち着いたまち、それとウォークアブルなまちというのも全くその通りだなと思います。私もアメリカでちょっと暮らしていたことがあるんですけども、アメリカのまちとヨーロッパのまちと全然違って、ご承知の通り、なんというかまち並みが落ち着いたっていうだけではなくて、路地性というのでしょうか、これ、隈先生に是非お聞きしたいんですけども、動画の中でも、路地性という言葉が使われていたと思うんですけども、その路地性というのが非常に魅力だと思いますね。小さな店が沢山あって、ちょっと曲がったところに思わぬ出会いがあるというような、そういうのが非常に魅力のあるまちになるのではないかなと思っています。それがですね、若者を呼び込むということにもつながるのではないかなというふうに思うんですね。やっぱり若者を呼び込んで、若者が沢山来てくれるっていうまちというものが、やっぱりまちの活性化になるのではないかなとそのように思ったりもします。隈先生、路地性についてもっと教えていただけたらと思います。

#### **清水市長**

隈先生お願いします。

#### **隈会長**

あの路地性という言葉はですね、その言葉をば一つと有名にしたのはジェーン・ジェイコ

ブスという、アメリカの批評家がいまして、アメリカ大都市の首都性、アメリカ大都市がどうしてこんなふうになっちゃったか、要するに自動車がばーっと入ってきてですね、所謂、路地がなくなってダメになっちゃったか。それは、路地でもって復活しなければならぬ。路地を観察して、いろいろ記述を書いたんですけど、その中で面白いのは「路地ってものの面白さは物と人だ」って言ってるんですね。建築のデザインというもの以上に、物と人が非常に大事で、今さっき向井さんのベンチっていう話で僕は思い出したんですけど、こうゆうベンチがあるとかですね、どうゆう看板があるとかですとか、そういう物の集積が路地の面白さをつくっている。そこに、人がくる。人も実はその路地という演劇の必定人物、例えば朝8時にこの人が出てきて、こういう掃除をし始めるとかですね、そういう一日の演劇の中のその役者として人間が出てくる、物と人が路地の中で劇を演じているんだというようなことをですね、言って。わあ！って、みんなその本で納得したんですよ。ああ！これだったのか、路地って！そこからアメリカの都市政策が変わったって言われている、非常に歴史的な本なんですけれども。そういうことの視点がですね、浦和なんかにはびったり私なんかは合うなというふうに思いました。

#### 清水市長

ありがとうございます。それでは続きまして、先ほどもドイツなどの、スポーツ文化のまちと非常に浦和が似通っていて、そのシンボリックな役割を、浦和が果たしているという話を伺いましたけれども、このスポーツというものを通じた浦和のまちづくりということについて、安藤委員からご意見頂戴したいと思います。お願いします。

#### 安藤委員

はい。今、聞いている話だと、浦和駅の西口あたりから、別所沼の方に抜けていくふう聞いていたんですけども。浦和のスタジアム、駒場スタジアムは東口のほうに、反対側の方にあるんですけども、そのスタジアムはサッカーの聖地、浦和の聖地だと思うので。私達はそこで、特に女子チームはそこをホームスタジアムとして、毎週使っているんですけども、これから、9月から、WEリーグと言って、女子サッカー初のプロリーグというのが完成していくんですけども、女性の活躍社会というのを理念としていくリーグとして、これからスタートしていくんですけども。本当に、同世代の女性の方だったり、多くの子ども達、またサッカーにいく高齢者の方が、熱い、激しい試合を見てるのは大変だという方には、お孫さんと一緒に、女子サッカーを見て来て欲しいなと希望があるんですけども、そういった時に、駒場スタジアムに来る道のりを経て浦和の良さというの、感じながら、スタジアムに向かって来れるような、まちづくりなんかも考えていただけると嬉しいなというのは思っています。本当に安全に楽しく、浦和のサポーターだけでなく、対戦相手のサポーターなんかも駒場スタジアム、浦和にレッズの試合に出てくるときに、浦和のまちは楽しいねと思ってもらえるように、駅周辺だったり、スタジアムに行く道なんかも考えていただけると嬉しいと思います。

#### 清水市長

ありがとうございます。それでは次に、賑わいの核となるのが駅前エリアだと思いますが、その伊勢丹のですね、浦和店長であります田口委員から何かございますでしょうか。

#### **田口委員**

はい。ありがとうございます。先ほど隈会長からも、コロナの後、どういうふうな方向性になるんだらうと、問いかけがありました。私たちもですね、デパートとしては、デパ地下がコロナで密になりがちだということで、先日も、市長も含めて市長と県知事にご来店いただいて、デパ地下の様子を見ていただいて、いろいろコロナの対策をしっかりとやっているつもりではありますが、やはり引き続きこういう状態が続くとすると、お客様の不安はつきないということはあると思います。それで私たちも敢えて地下ではなくて屋上で何かできないだろうかという話を、今、させていただいてまして。以前、デパートの屋上といういろいろな遊園地があったり、楽しい思い出のある方が多いと思うのですけれども、なかなか今いろんな規制の関係で自由には出来ない。ただ、今、実は屋上の防水工事と一緒に綺麗にして、ゆっくりくつろげるような、伊勢丹の屋上が人工芝をひいて板をしっかりとひいて、お子様と一緒にゆっくり遊べるような空間を作ってみました。それで、これだけだとちょっとつまらないので、屋上で10月からトライアルで3か月間、デパ地下ならぬ、デパそらプロジェクトというのを、ちょっと立ち上げてみようということで、ご家族でキャンプをされたりとか密にならない形で屋上で楽しんでいただく。今、先ほども向井委員からもありました、ホッとできる環境とか、空を眺められるとか、そういうところで駅前というのはまさにそういうところが少ない状態です。ただビルがいっぱいあるのを逆手にとって、屋上に行くと空が近い、そういう中で過ごしていただける環境というのを、これからは上手くいろんな再開発がある中で、ビルというのは無くなりほしくない。当然、公園は必要なんですけれども、そのビルの上の辺りで、しっかりとお客様が、地域の方がくつろげる。しかもビルの上というのは安心・安全ですし、車が通らない、非常に安心して過ごせる場所ですので、そういった形で、ひとつ伊勢丹の屋上でトライアルをしてみようかなと。ということで「デパそらプロジェクト」という、こんなロゴを作って10月からやろうと思っています。宣伝になっちゃって申し訳ないのですが、まさに地域住民のためにいろいろできないかなと。ただここで過ごしていただくことがとっても大事なかなというふうに考えておりますが。隈会長、こういうのを他の都市とか、あるいはまちのデザインの中でビルの屋上とかそういうところを考えるとというような発想というのは、どこかほかでもなにかあるのですかね。

#### **隈会長**

あのですね。ビルの屋上って20世紀は全く無視されて、機械に占領されていたですね、簡単に言うと。空調の屋外機というのが、どうしても必要なので置き場は屋上しかないだろうと、人間が行く場所じゃない、というふうにして全く有効利用されてなかったのですけれども、実はすごい資源で、今言ったように空に一番近い、本当に安全で空を感じる自然を感じる事が出来る場所なので、今いろいろなところで、屋上を上手く再利用する、

あるいは最上階と屋上を繋ぐ、そういう最上階の部分を半分、屋外にするとですね、更にこう上手くなるので、そういう新しいムーブメントが世界中で、特に意識の高いまちでそういうことは起こってますね。

#### **田口委員**

ありがとうございます。意識の高いまちのお手本になれるように、頑張りたいと思います。

#### **清水市長**

ありがとうございました。それでは続きまして、交通網の要であります、JR 浦和駅の駅長さんの鳥羽委員から、何かご意見を頂戴できればと思います。

#### **鳥羽委員**

そうですね。駅というとなると、いろんな方がいるんですけど。そう言った多世代の交流とか、もちろんコミュニティの強化ということは絶対なんですけれども。隈先生にちょっとお聞きしたいのですけれども、防災に強いというのですか、やはり JR も東日本大震災を経験した時のことを教訓にしたこともありまして、そう言った防災であったりとか、災害に強いといったまちづくり、建築とかそう言った面からも、うまいこと何かあるのですか。今後先を見て何かできるようなことがありましたら、お話を伺いたいと思います。

#### **隈会長**

防災はですね。東日本大震災の後もその後も、災害が多発している時代で非常に意識が高まっています。都市計画も、今まで都市計画というと交通・商業みたいな感じなんですけど、そういうものと同レベルで防災は扱わなければならないという時代が間違いなくきています。その時に駅の周辺というのは、非常に重要になってきます。駅の周辺というのは皆さんですね、一番自分にとって身近な場所で、オープンスペースも作りやすい場所なので、駅周辺をいかに防災空間として、再デザイン、リ・デザインするかということはこれからの時代の必須のテーマだと思いますね。

#### **鳥羽委員**

是非ですね、その安全というものは目に見えないものかもしれないのですけれど、そう言った空間というのですか、場所も提供できるような感じになればいいなと思っております。よろしくお願いします。ありがとうございます。

#### **清水市長**

ありがとうございます。それでは続きまして向井委員にですね、いろいろ先ほど隈先生からご質問ありましたけれども、向井委員の方から隈会長のほうへ何かご質問がありましたら。

#### **向井委員**

はい。駅周辺ということでいろいろ考えてみたんですけども、ただ、これから30年後というのを考えると駅の役割というのが変わっていくんじゃないかなと思うのですね。今、コロナでこういうふうに変換が起こってますけども、コロナが終息してもやっぱりリモートという働き方がこれから定着するでしょうし、あと今若い人が車からどんどん離れて、

鉄道をつかうかという、鉄道を使う子もいるのですけど、カーシェアリングがこれからは一般的になって、一家に一台とか二台とか車を買うというような発想もなくなっていくと思うので、駅を利用するという頻度がもしかしたらこれからは減っていくんじゃないのかな、と思うんですけれども、その交通の手段として駅を利用するっていう役割がこれからどんどん変わっていくんだろうなと思うんですね。だから駅からどこかにいくということではなく、駅に行く理由というのを他にも駅の魅力として、商業でもない交通でもない、何か文化的なものを駅が発信できるような。駅に行けば何かが起こるんじゃないか、駅に行けば安心できるんじゃないか、駅に行けば…っていう、何かその動線を作る新しいアイデアというのを隈さんの頭の中ではもう想像してらっしゃるのかなという部分を、伺いたいなと思いました。

### 隈会長

今、向井さんが言ったように、20世紀の駅というのは、やはり基本的に交通なんですよ。でも交通っていうもの以上に、駅というのは地域の象徴というコミュニティと象徴として重要なんじゃないかという、議論が今出てきています。コミュニティの象徴としてはですね、ヨーロッパの駅はすごく象徴としてカッコいいじゃないですか。もちろん商業的なものも入っているし、カフェとかレストランなんかも入っているけれども、それ以上に駅の空間自身が魅力的で象徴になっている。そういうものが出来たらいいなというふうに僕は思っています。実は今、パリでも一個駅のデザインをやっているんですけどね、それはパリの北の方のサンドニ・プレイエルとって、ちょっと浦和に似ているのは、サッカースタジアムが、有名なサンドニスタジアムってパリのサンジェルマンのチームの、サッカーファンの方はみんな知っていると思うけれど、あそこのスタジアムの駅で、地下鉄4本とフランス国鉄が入っている駅で、今までごちゃごちゃだったんですよ。それを上手く纏めて、駅のコンペがあって、僕らは駅は公園だって、駅の上が全部緑になっていて公園になっていて、それで、そうするともちろん交通として駅のところにいくけれども、駅に行くとも緑も味わえるし、それから、さっきの屋上の話しにも繋がるんだけど、駅の上が全部緑で、そこに斜面でずっとこう上がっていけるという、そういう市民全部のレクリエーションの場としての駅ということが出来て。そういうとき人が集まるから、下にも大きな商業空間が入る事になったんですけど、そんなような形で駅の新しい形、再定義というのは、世界中で起こっているもので、そういうのはこれからの時代の一種のブームになると僕は思いますね。

### 清水市長

ありがとうございます。それでは次に市川委員から、今、駅周辺などの話がありました。市川委員から隈会長にご質問などがありましたら。

### 市川委員

私実は脱サラでありまして。今のUR都市機構に11年間務めた経験があります。40年程前は多摩ニュータウンが非常に人気がありまして、分譲住宅を募集しますと100倍を

超えるときがありました。その時の購入者層がですね、ほとんどが主に子育て層、子育て世代でした。それで今多摩ニュータウンがどうなっているかという、団地の老朽化と住民の高齢化という問題を抱えてなかなか解決しないという。今の浦和もですね、マンション人気があるのですが、恐らくやはり子育て世代だと思うのですね。このテーマ2050年に浦和が目指すまちと、この中に人口構成がどうなっていくのか、これを注視していく必要があるんじゃないかなと思うのですね。これは質問というかご提案ですが、考えながらいかなきゃいけないかなと思うのですね。うまい具合に解決策があればなと思うのですね。

#### **隈会長**

そうですね。人口構成はやはり浦和は教育都市で、ファミリーで来て子どもを育てたいって人がその後どうなるか。多摩ニュータウンの場合は、やはりそのまんま皆、年取ったって問題があるわけですね。更新しないで若い人への更新がなくて、子育てで引っ越してきた人が、そのまま年をとって世帯構成が非常に偏ったというのが多摩ニュータウンの問題だと言われますね。そうすると、魅力が失われてくる。その世代がそのままスルーで上にいっちゃうので、偏りがあって、まちの活気がなくなる。それをどういうふうに更新させて、若い世代が常に入り続けてくるような。もちろん年をとってそのまま上がっていく人も居てもいいんだけど、若い人も入ってきて、全体としてバランスが取れて、ダイナミズムが感じられるまちにするかっていうのが、私は大きな課題だと思います。

#### **清水市長**

ありがとうございます。それでは坂井委員から隈委員に何かご質問などはありますでしょうか。

#### **坂井委員**

ありがとうございます。大学にずっと勤めてて良いところは何かというと、若者がいつも近くに居てですね、若者がどんどん入ってきて、どんどん出ていくんですけど、いつも18から22歳位の若い人と接していただけるというのも魅力的ですね。本当に若くいられてることなんですね。やはり若者がどのくらいそばにいられるかっていうのがまちの活気ももちろんそうですし、そこに住む人たちの生活にも非常に関係していきんだらうな、影響してくるんだらうなと思うんです。今、隈先生からも若者を入れて新陳代謝をとっていきんだ、それが大事だというご指摘があったのですが、それと同時にまちの魅力として若者を引き付けていくというのが、非常に重要な要素なのではないかなと思うのですね。その辺はどのような方策というのが、ありますでしょうか。

#### **隈会長**

今、坂井委員が言われたように、学校があるまちというのは、世界でも活気があるまちなんですね。学校があると学生は単に勉強しているだけではなくて、まちにでてくるんですね。まちで呑んだりとか、まちでアルバイトをしたりとか、まちの中に学生が溢れてくるというのは、まち全体に活気が増して、どこでも人気があるし人口が増えていく。学生に

よって起こるんですね。これ、世界のまちで統計を取った人が居て、学校とそれからまちの活気の関係、アメリカでいうとやはり、シリコンバレーなんて近くに大学があるから、学生のそういう頭を使って企業が伸びて、そういうまちとそれから学校との連動というのが非常にうまくいった例の一つがシリコンバレーなんですけど。そういう部分の連動の仕方みたいなもの、学生がやっぱりまちに出てきて、まちの人と交流するような仕掛けというのが必要だと思いますね。それがあると学校があることがまちの活気に繋がっていくと思います。

### 清水市長

ありがとうございます。それではですね、大変活発な意見交換をさせていただきましてありがとうございます。時間もそろそろ近づいて参りましたので、最後に今回の懇話会を総括して限会長よりお願いしたいと思います。

### 限会長

はい。今日ですね、皆さんから非常に活発な意見をいただきまして、非常にいい懇話会になったと思います。浦和とはどういうまちかっていうですね、浦和の所謂、顔、表情みたいなものが皆さんの意見で私もだいぶ見えてきました。この前のまち歩きでですね、たいぶ浦和のまちとしてですね、ウォーカブルなまちであったとかですね、意外に自然があるとかですね、小さな部分で魅力的な部分が沢山みたいなことは、私、把握することができたのですけれども、今日の皆さんの意見で、更に視点が立体的に、具体的に見えてきた、というふうに思います。一つキーワードは「駅」ということ、重要性ということですね、駅長の先ほどの意見も、非常に参考になったんですが、やはり浦和のこの駅というのは、浦和のコミュニティにとっては非常に重要な場所である。そこにはですね、伊勢丹さんもかなり早くから出店していて、全国の伊勢丹さんの中でも非常に有名なお店なんですよ。そういうですね、駅と商業施設、コミュニティの中で非常に大きな意味合いを占めていてをどういうふうにしてですね。リ・デザインするかということがですね。重要なテーマとして見えてきた気がします。そのリ・デザインはコロナ後のまちは何かというの、今日はテーマとして皆さんから出てきたと思います。コロナ後のまちというと、単にリモートであるとかですね、Zoomであるとかってそういう意見がでるのですが、実はテナントの構成ですとか、そういうものにも大きな影響があるというのが市川委員がいろいろご指摘いただいて、コロナ後のまちにふさわしいまちづくり、まちのデザインというものを、今回ちょうどタイミング的に本当にある意味では、そういうことを考える絶好のいいタイミングで懇話会始まったというふうに思います。この新しい時代に、浦和というものはどういうポジションにあるか、そのポジションは向井委員が全国のまちを旅サラダで見えて来て、そういう目で見ると浦和は地味だ、取り上げられないことがない、実はですね、取り上げられないことがない地味で成熟した都市が、これからコロナ後に魅力を発揮してくるという一つ流れが私もあると思うのですよね。そういう、浦和の全国へのポジションニングというものも見えてきた感じがいたしますので、そういうものをですね踏まえて、今後この懇話会

を重ねていって具体的な計画、より具体的な話し合いと、話が進んでいくステップアップしていったならば、素晴らしいなと今日は非常に希望が見えてきたなというふうな気がします。

#### **清水市長**

隈会長ありがとうございました。本当に沢山のですね、これからの浦和のまちづくりをしていく中でキーワードや、ヒントが沢山出てきたと思います。以上で（仮称）浦和駅周辺まちづくりビジョン有識者懇話会は終了となります。委員の皆さんからのご意見を踏まえまして市民の皆様からの住みやすい、また住み続けたいと願っていただけると共に市外域の方からも住みたいと願っていただけるような浦和のまちづくりを進めていきたいと思っております。本日ご参加いただいた委員の皆様には本当にありがとうございました。またご視聴ありがとうございました。